



大方あかつき館報

第17号
2011年6月発行

あかつき

上林暁の絶筆『秀夫君』

上林暁文学館協議会委員長 野並 浩

文学への執念

高知市 (男性)

◆すばらしい場所に、すばらしい建物！

京都市 (女性)

◆心、善、隣、友好之道

韓国・東国大学校 李美亭 (他3名)

等々

◆遍路の途中で見学できてよかった。

岡山県 (女性)

◆ここに来てさせていただいたのは、ご縁

があつたと感無量です。有難うござい

ます。

高知市 (女性)

◆元気をもらいました。ありがとうございます。

徳島県 (男性)

◆暁先生のすばらしさ、妹さんの愛の深

さを強く感じました。

黒潮町 (男性)

君』をテーマにしたものです。

上林さんが寝たきりになった状態で書いた原稿は、折れ曲がった文字が原稿用紙のマス目から大きくはみ出し、その上

に、妹の徳広睦子さんが兄に問いただしながら書いた、添え字が重なっています。冒頭の感想は、文学館に添え付けの、入館の記念に、どうぞに書かれた観覧者の声の一部です。

睦子さんは『兄の左手』という手記の中で、上林さんの最晩年を次ぎのように綴っています。

〈兄は死の四日前まで書きつづけ、十九枚の原稿が残された。それはほとんど、全部、字というよりも、まだ字を知らない幼児のいたずら書きと言った方がいいかもしれない。一枚わずかに、三、四個しか字になつてないものもある。

それは凄絶とも言える。(略)

自らを励まし、鞭打ち、渾身の力をこめて4Bの鉛筆を握っていた。兄の文学への執念が、一生が、ここに凝縮されているような気がした――。

薄れる記憶を懸命に手繰り寄せる上林さんの熱い思いが、私の胸中にも迫ってきました。

上林さんは60歳の時、脳溢血を再発。以来、右半身不随で18年間病床に就きましたが、睦子さんの献身的な介護と口述筆記に支えられて、文学一筋の道を歩み

通すことができたのです。

ところで、戦前上林さんは、同じ在所で東京の大学へ通う3人の後輩と親交を深め、度々書斎にも案内したそうです。信頼のおける3人が、若くして老い込もうとする上林さんの周囲にあつて、気鋭の空気を漂わせ、精神に精気を注入してくれたことを、上林さんは高く評価しました。敗戦の混乱の中で『年少の友』（上林晩全集5巻収蔵）と題して作品に記しています。

3人は共に先の大戦で戦陣に散りました。上林さんは自分一人が残され、寂寥感に陥り、痛恨の極みであつたのであらう。

睦子さんは、兄がもはや病床から立ち上がるのが難しいと悟った時、自分の何分の一かの若さで死んでいった、年少の友をもう一度掘り起こして、それぞれの人生を書きたかつたのではなからうか、と述懐しています。その中の一人が、絶筆となつた『秀夫君』です。行年25歳。陸軍中尉。

入野松原の一角に開館して、十数年が過ぎ落ち着いた雰囲気漂わせている白亜のあかつき館。その前方に、

へ梢に咲いてゐる花よりも 地に散つ

てゐる花を 美しいとおもふ 上林 暁の文学碑。上林さんの作品の根底に息づく、優しい眼差しに、限らない共感が湧く。

隣には、暁が師と尊敬したノーベル賞作家・川端康成揮毫の「上林晩生誕の地」の記念碑が、ともに遙か太平洋を望んでいます。上林さんが古里を著した『春の坂』で、文部省芸術選奨励賞（昭和33年度）を受賞。そして、館内の入口に飾られている上林さん自身のブロンズ（久保孝雄・作）。それをモデルにした『ブロンズの首』で第1回川端康成文学賞に輝いています。

昭和文壇に不朽の名作を残した上林文学。これからも語り継いでいきたいと思っています。

へ付記

上林さんの絶筆となつた『秀夫君』は、私の従兄（いとこ）に当たります。戦局が日増しに熾烈さを極め、敗戦を半年後に控えた昭和20年2月6日。従兄は陸軍航空隊員として、僚友と共に宮崎飛行場から那覇を経由、台湾へ向う途中で沖縄の海に散りました。

かつて、私は家内と末娘を同伴して、従兄の供養に沖縄戦終焉の地、摩文仁の丘にある『平和の礎』に詣でました。紺碧の海に眠る、従兄の御霊、安らかにと念じ、「戦争の悲惨さ」と「平和の大切さ」を身を以て感じたことでした。



企 画 展 の 歩 み

回	企 画 内 容	備 考
	上 林 暁 文 学 館 の 開 設 — 署名入り受贈本に見る — 上林暁の文壇交流	平成10年4.12 (1998年)
1	上林暁 — 川端康成との交流 —	
2	上林暁 — 生原稿・色紙ほか —	
	上林暁生誕百周年記念 ○記念企画展 「上林暁と俳句」 ○記念色紙展	平成14年10.6 (2002年) 「不断の花」発行
5	— 上林文学 と その妹 睦子 — 「兄の左手」	
6	“望郷賦” — 清流・四万十川への尽きぬ想い 「四万十川幻想」	
7	「上林文学とふるさとの人々」	
8	— 心温まる父母への熱い想い — 父 イタロウ 母 ハルエ	
9	— 五高時代の日記 — 「上林暁 と 熊本」	
	開 設 10 周 年 記 念 今までの企画展の展示	平成20年4.12 (2008年)
10	「トンネルの娘」	
11	— 上林暁没後30周年 — 絶筆『秀夫君』	平成22年8.28 (2010年)



あかつき館に書の寄贈

2010年9月30日 山沖春欄氏(黒潮町出身)より寄贈 —

この作品に寄せる作者の思い、(東西に長く広く松原と海が輝き、まさに「白砂青松」そのもののふるさとの海、私はこの海と浜そして松原が織り成す景観がいつまでもそこなわれない様、守っていただきたいと願っています) とのことです。

黒潮町にふさわしい書です、一度見に来てください。



題(海)「ふるさは海ひかりをる」

平成22年度の催し風景

上林暁没後30周年記念第11回暁忌俳句大会

2010年8月28日上林暁没後30周年記念第11回暁忌俳句大会が黒潮町保健福祉センターで開催されました。俳句連盟会長のたむらちせい先生を講師に迎えて55名の参加がありました。



あかつき館屋上の改修

あかつき館の西側外階段の改修を平成22年度に実施しました、きれいになったあかつき館を紹介します。

